

知財生成AIのパラダイムシフト：効率化の「道具」から、発明創出の「パートナー」へ（2025-2026）

実務の下流・中流工程における「作業代替」



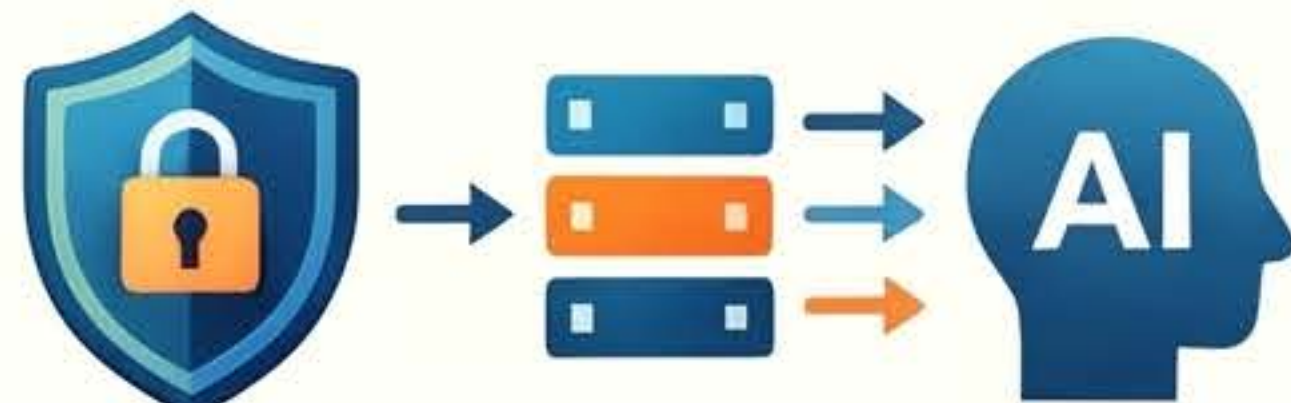
検索式の作成支援や公報要約、明細書ドラフト作成など、定型業務の工数削減が中心。

「AI搭載」が差別化要因だったPoC期



フェア出展者の多くが、既存資料をフォーマット整形するレベルの機能を模索。

守りのガバナンスとセキュリティ



入力データの学習利用防止など、ツールの安全な利用環境を整えることが最大の議論点。

2025年：
実装検証 (PoC)
と省力化の
時代

2025年と2026年におけるAI活用の構造的変化

調査・分析、明細書作成 (中流～下流)	主要対象工程	発明創出、R&D連携 (最上流)
人間の下讀け (清書・読解ツール)	AIの役割	思考の拡張 (共創パートナー)
クラウド (Azure等) への依存	インフラ設計	完全オンプレミス・専用機の台頭

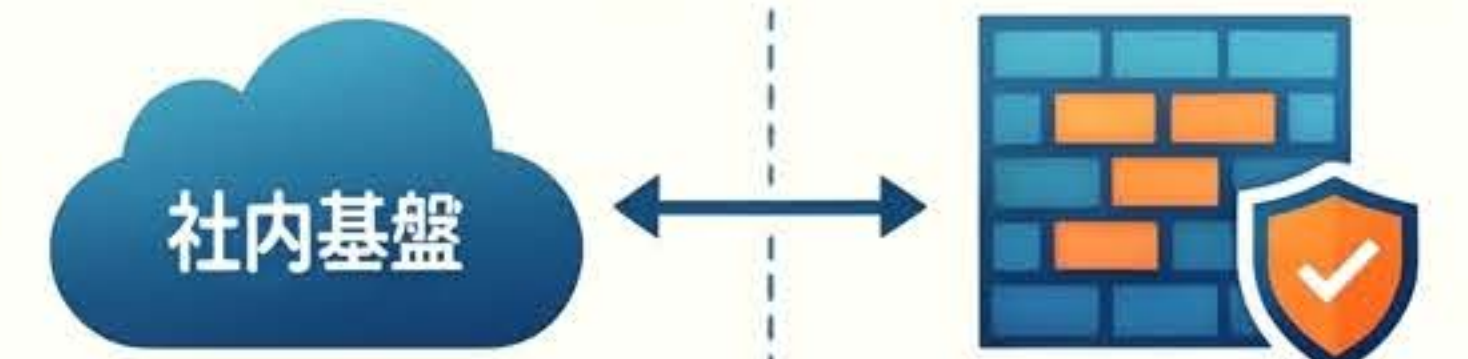
2026年：
発明創出と
戦略的実装の
時代

最上流の「発明発掘」への能動的介入



AIによる対話型問診や思考フレームワーク (QFD等) を用いて、研究者の暗黙知を構造化。

「接続」と「隔離」の二極化アーキテクチャ



MCPによる社内基盤との統合と、重要機密を守る物理隔離型LLMの棲み分けが成立。

AI実装が実務の「前提条件」へ昇華

67%

フェア講演の67%がAIを主題とし、知財部門の役割は「戦略的構想」へと再定義された。

2025年から2026年にかけて、知財業界における生成AI活用が「下流工程の省力化」から「最上流の発明創出」へと劇的に進化しました。